

シーズンは忙しかったに違いない。というのも台風発生数が1995年は記録的に多く、翌1996年もかなり活発であったからだ。まず、Landsea (NOAA/Hurricane Research Division) は、大西洋の台風の発生・発達に関連する大規模要因を1つ1つ調べた結果、95年にはほとんどすべての大規模要因が台風活動が活発化する傾向を示していたと発表した。このような大規模要因には、SST、鉛直シア、海面気圧アノマリー、可降水量、エルニーニョと南方振動、それに準2年振動などがあるようだ。また、Goldenberg (NOAA/AOML) は、大西洋における台風活動の変化を数年規模の変動成分と

10～20年スケールの変動成分とが重なったものとして説明し、後者の変動スケールでの活発期は実は1988年から始まっていたと指摘した。一方、Saunders (University College London) は、95年の記録的な台風発生についてはSSTが高かったことが支配的な要因であったと結論づけた。これに対しては会場のGrayから、もっと総合的に見なくちゃいかん、との指摘があった。熱帯気象学の巨人(と誰かが称していた)Grayは大の数値シミュレーション嫌いであるとともに、今大会随一のエンターテイナーであった。

(筒井純一)

支部だより

関西支部第19回夏季大学、盛会裡に終了

関西支部第19回夏季大学は、昨年に引き続き、大阪市立科学館において同館との共催で実施された。大阪管区気象台及び日本気象協会関西本部の後援を受け、実際に多大の協力を得た。「天気変化の仕組みと新しい天気予報」をテーマとし、7月23日に丸山健人氏(東京学芸大学)「大気の循環—偏西風からQBOまで」、権藤光宏氏(大阪管区気象台)「天気予報はどう作られるか」、24日に里村雄彦氏(京都大学)「局地循環—積雲と海陸風を中心として」、梶原靖司氏(大阪管区気象台)「メソ天気予報—その現状と展望—」の4講を持ち、この他大阪教育大学の協力を得て大気圧、雲物理に関する気象実験を実施した。本年も会場の収容人数をはるかに越える110名余の申込みがあり、数10名の方の受講希望に添えなかった。実際の受講者は75名であった。

毎回実施しているアンケートに対する回答から見ると、QBOについて初めて聞く現象として受講者に強い印象を与え、海陸風というよく知られていると思われる現象について、理解が深まったと好評であった。また、天気予報の2講についてもそれぞれ最近の成果がよく紹介されたという評価が寄せられ、気象知識の普

及という目的を十分に果たしたと考えられる。アンケートには真剣な回答が寄せられ、多様な受講者の姿が浮き彫りにされた。講義内容、時間配分、講義手法など適切に集約し、今後に反映させたい。

気象実験にも大きな関心が寄せられた。大気圧に関する実験は身近な材料を用いて行い得る点に注目され、雲物理の実験はビデオカメラを利用したディスプレイで一層分かりやすくなった。今後に期待が寄せられており、新規テーマを開拓して継続するようにしたい。

関西支部では夏季大学を無理なく継続できるようにするため、省力化に努め実務を相当整理、軽減してきたところであるが、受講者からは予習のためテキスト事前配布の要望が多く、これに応えるよう適切な方策を模索するなど、気象知識の普及という目的をよりよく達成するため一層努力したい。終わりに、講演及び展示実験、また受付、会場運営などの実務に当たられた各位に深謝の意を表する。

(関西支部)